

令和 2 年 7 月 13 日現在

機関番号：12501

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K02655

研究課題名(和文)ミャオ語系諸語文法の記述言語学的・歴史言語学的研究

研究課題名(英文)A Descriptive and Historical Study of the Hmongic Languages

研究代表者

田口 善久(Taguchi, Yoshihisa)

千葉大学・大学院人文科学研究院・教授

研究者番号：10291303

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、東アジア・東南アジアに分布するミャオ語系諸言語について、文法について記述言語学的かつ歴史言語学的な研究を遂行することである。この研究期間内においては、ミャオ語系諸言語の人称詞、類別詞、直示動詞について研究を行った。その結果、人称詞については、本来の融合タイプから分析的タイプへの変化が見られること、類別詞については定期的な指示を行うものがあることなど類型論的に有意義な発見があった。直示動詞については、venitive動詞に二項対立があり、移動者の本来の所在地がキーになっていることを見出した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ミャオ語系諸言語は、1000万人を超える話者を持つ言語でありながら、その話者のほとんどが中国国内に位置するところから、従来詳しい文法的実体はほとんど明らかにされてこなかった。本研究では、それらを研究者が保持する数種類のミャオ語話者のネットワークを使用して推し進めるところに狙いがあった。その結果、世界の他の地域における言語と比較対象して研究する上で重要と考えられる発見があった。

研究成果の概要(英文)：This is a descriptive and historical study of the Hmongic languages, which are distributed in the East and Southeast Asia. In the given period of study, the author conducted a study of personal pronouns, classifiers, and deictic motion verbs in these languages. The findings of the study are the following: in personal pronouns, the fusional type of personal pronouns have been changing into the analytic type; in classifiers, there are a few classifiers that mark definiteness. These are typologically significant findings. In the study of deictic motion verbs, the author finds that there are two contrastive venitive verbs, and the key of the contrast is the home position of the mover.

研究分野：言語学

キーワード：ミャオ語 文法変化

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

ミャオ語系諸言語は、ミエン語系諸語とともにミャオ・ヤオ語族を構成する言語群で、東アジアから東南アジアに分布する。研究対象とするミャオ語系諸言語は、フモン語を除いてすべて中国に分布し、話者人口は500万人を超える(王・毛 1995『苗瑤語古音構擬』)。その代表的な言語を、先行研究によって見てみると以下のものである(括弧中は英語による表記、中国の学者による名称): コション語(Qo Xiong, 苗語湘西方言), フム一語(Hmu, 苗語黔東方言), フモン語(Hmong, 苗語川黔滇方言), フメー語(Hmyo, 苗語羅泊河次方言), ショオ語(Ho-ne, 畲語), キョンナイ語(Kiong-nai, 炯奈語), プヌ語(Pu-nu, 布努語), パフン語(Pa-hng, 巴哼語), パナ語(Pa-na, 巴那語)。これらの言語は、音韻・語彙において差異が大きいことは従前より指摘されてきた(Niederer 1999)。しかし、従来の研究によってほとんど指摘されてこなかったのは、形態・文法面での差異の大きさである。その原因としては、まず、この語族が世界の語族の中でも記述が遅れている言語群であることがあげられる。500万以上の話者を要する言語群としては、文法研究の先行研究は少ない。出版された総合的文法書としては、現在に至るまで、コション語についての3点(羅 1984, 向 1999, 余 2010), フモン語についての3点(Lyman 1979, Harriehausen 1990, 羅, 楊 2004), フム一語についての1点(王 1986)しかなく、Harriehausen (1999)と余(2010)を除いては、いずれも簡略的な記述にとどまる。Haspelmath, et. al. (2005) The World Atlas of Language Structures は、もっともよく引用される類型論的な記述であるが、そこで引用されるミャオ語のデータは、Harriehausen 1990(ときに Lyman 1979 も引用される)のフモン語のデータにとどまっている。記述が遅れている原因のひとつは、ほとんどのバラエティが分布する中国において、外国人が言語調査することが困難であったことにある。したがって、従来の文法研究は、中国外に分布するミャオ語であるフモン語に偏ってきた。第2に、ミャオ語は、漢語から多くの影響を受けていることは疑いないところであるが、そこから、漢語の文法とほぼ同様のものであろうという推察されてきたことが原因としてあげられる。以上のように、中国国内におけるミャオ語のデータにアクセスできる言語研究者による、類型論的視野に立った研究が期待されるところである。

2. 研究の目的

本研究は、ミャオ語系諸言語の文法について、言語類型論的情報を収集・整理するとともに、それに基づいてミャオ語文法の過去の姿を究明しようとするものである。ミャオ語は、ミエン語とともにミャオ・ヤオ語族をなすが、世界的に見ても記述が遅れている言語群である。ミャオ語系諸言語間の文法的差異は、言語類型論的に有意味であるほど大きい。その詳細を明らかにできれば、言語類型論に大きな貢献をなすことが期待できる。このことを、申請者が蓄積してきたデータと海外共同研究者との協力によって明らかにする。

3. 研究の方法

(1)申請者の保有するデータを主要な分析の対象とするが、データ補充のため海外の共同研究者を依頼する。これにより、各言語についての必要な情報を確保する。(2)文法項目ごとに、言語の特徴を整理して対照できるような形式にする。(3)選択した文法項目に

ついて、祖語の文法についての歴史的研究を行う。(4)海外共同研究者との研究会を開き、文法問題、歴史研究について討論を行う。(5)得られた成果を、国内・国際学会、研究会で発表する。

4. 研究成果

研究成果は、人称詞、類別詞、直示動詞の3つにわけることができる。

(1) 人称詞については、フメー語(Lan Hmyo)について記述を行い、フムー語(Hmu)、シヨン語(Xong)との比較を行った。その結果、ミャオ語は本来的には、人称詞は人称と数の融合タイプであると考えられるが、フメー語においては、人称と数を分離して、分析的に表現するタイプへと変化しつつあるという結論を得た。これは、漢語からの影響とも考えられる。

(2) 類別詞については、フメー語について詳細な記述を行った。その結果、この言語の類別詞について以下のようなことがわかった。

(a)数詞と指示詞のホストとして機能する自立的成分で、名詞とは異なった事物のあり方を記述するものであること

(b)いわゆる数量類別詞(numeral classifier)言語に典型的に見られる、1次元・2次元・3次元の類別を行うこと

(c)数詞とは共起せず、漠然とした複数を表す類別詞(非個別化類別詞)が3種類あり、その中には定の指示を行うものがあること

(3) 直示動詞については、まず、祖語における直示動詞の語彙的再建を行い、祖語においては4つの直示動詞があり、andative と venitive のそれぞれに、home position という概念で規定される対立があったのではないかと考えた。この内容については、学会で発表した(SEALS27)。海外共同研究者と共同研究を行い、以下のようなことがわかった。

(a)フムー語、フメー語においては見られる[home](home position)についての対立が、シヨン語においては見られないこと

(b)シヨン語においては、経路動詞「戻る」が直示動詞との融合によって直示動詞化しており、「戻る」経路義の包入のあるなしで、直示動詞に4項が成立していること(以上の2点については、国際学会 SEALS29 にて発表した)

(c)フムー語、フメー語における[home]対立の包入された2つの直示動詞(フムー語においては venitive と non-venitive、フメー語においては venitive)には、[home]の関与しない場合があり、その場合には、[-home]の動詞には「(心理的)距離がある」とでもいうべき意義があること

(d)フメー語の venitive 動詞は、Fillmore(1997)の英語動詞 come の選択基準のすべての場合に使用できること

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計3件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 田口善久	4. 巻 48
2. 論文標題 動詞mmiAの生態と文法化～ミャオ語文法ノート(4)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 人文研究	6. 最初と最後の頁 141-159
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Yoshihisa Taguchi	4. 巻 0
2. 論文標題 On Two Venitive Verbs in Lan Hmyo	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Topics in Middle Mekong Linguistics	6. 最初と最後の頁 169-179
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田口善久	4. 巻 18
2. 論文標題 ミャオ語文法ノート～羅泊河ミャオ語の人称詞について	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 ユーラシア言語文化論集	6. 最初と最後の頁 13-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件/うち国際学会 1件）

1. 発表者名 Yoshihisa Taguchi, Anlong Ji, and Xiuju Wu
2. 発表標題 COME and GO in Hmongic
3. 学会等名 SEALS 29（国際学会）
4. 発表年 2019年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----